

「重い」と「軽い」

二つのマッチ箱を用意して、それぞれに「重い」「軽い」という漢字カードを貼ります。重いほうにはクギが何かを詰め、軽いほうは綿を詰めるか空にしておけばいいでしょう。ただしこれは抽象語ですので、箱の中身を入れ替えたりして聞いてみる必要があります。

「長い」と「短い」

リボンでも用意して、これに「長い」「短い」のカードを貼ります。このとき違う色にしておくとも色を覚えることにも役立ちます。また、たとえば白を長くして、赤を短くしたとすると、今度はその反対をやってみれば、「長い・短い」の違いが本当に理解できたかがわかります。

「熱い」と「冷たい」

「冷たい」は本文でも述べたように氷の入った袋を持たせます。「熱い」はお茶碗に熱めのお湯を入れ実際に触らせます。このとき茶碗に「熱い」と書いておきます。

「タオルが濡れちゃったわね」

最初に乾いたタオルを触らせます。その後でそのタオルを濡らしてもう一度触らせます。そうすると手の感触でこの字の意味がわかります。また少し漢字がわかっていれば、この字の「さんずい」から、水に関係することなのだということがわかるでしょう。

「タオルを乾かしましょうね」

「濡れたタオル」を触らせた後で、一緒に干しましょう。干しながら「干す」という漢字を示します。乾いた後で、タオルに「乾く」というカードを

貼って触らせます。手の感触で覚えさせます。こうすると「干す」という行為の意味もだんだんわかってきます。

「新聞を取って来て」

初めは新聞に漢字カードを貼り、「お父さんに持って行ってね」と言います。子どもはけっこう喜んでやりますから、持って来たら父親は褒めてやりましょう。そのうちに「新聞」というカードを見せて取りに行かせます。いつも持って行っているものだから、自然と覚えています。

「靴を揃えてね」

子どもが出かける前に靴に漢字カードを貼っておきます。「靴」を覚えたら、帰って来た子どもにわかるように靴を揃えておきます。そうすると靴を揃えることは、帰って来たときと反対に向けて、次に履くときに履きやすくしておくことなんだとわかります。

「電気を消しましょうね」

電気に漢字カードを貼ります。スイッチのところにも同じカードを貼ります。そうしてスイッチを切って電気を消して部屋を暗くします。電気を消すのは寝る前にいつもすることなので覚えていきます。

「一、二、三……」

おはじきでも積み木でもみかんでも、その数を入れた入れ物に漢字カードを付けておきます。抽象的な字ですが、目につくことも多いのでだんだんに覚えます。年齢を言うときに使いますので、指を使って教えてやるのもいいでしょう。

「速い」と「遅い」

これは抽象語ですので子どもが覚えるのにはむずかしい字です。しかし“しんにゅう”は「道」に関連のあることを表す字ですから、車に乗って出かけた時にでも、その感覚で覚えさせるのがいいでしょう。「はやい」には「早い」もありますので、これは朝早く起きた時に同じ「はやい」でも二通りあることを教えてやればいいのです。

「お母さんの指輪を取って来て」

子どもは母親の手はよく見えていますから、指輪と言うときに手真似をしてやればすぐにわかります。テーブルの上にでも漢字カードをつけて指輪を置いて取って来させます。ここから丸いものが「輪」ということを教えるのにも役立ちます。

「三輪車に乗ろうか」

輪が三つある乗り物ですから、これは比較的簡単に覚えられます。三輪車に乗せる前にいつも漢字カードを貼って見せていけば、自然とこの漢字がわかるようになるでしょう。三輪車から自転車に変わる時に、自転車は二輪車なのだと教えれば、違いがはっきりします。

「高い」と「低い」

柱に身長計を貼り、「背が高くなったわね」と言って、以前に計った身長と比べて見せます。その時に「高い」「低い」のカードを貼ります。次に計ったときは「高い」だったのが「低い」に変わりますから、その意味合いをだんだん理解していきます。背が高くなったことは褒められたと思いますので、覚えやすいと思います。

「自動車に乗ってお出かけしようね」

子どもは車が好きですから、車に乗せるときに「自動車」という言葉を使い、車の中の目につくところに漢字カードを貼っていればすぐにわかるようになります。三輪車などと比べて、同じ「車」という仲間なのだとして理解していきます。

「窓を開けましょうね・閉めましょうね」

目につきやすい高さの窓ガラスに「窓」というカードを貼ります。子どもはよく外を見ますのでこの字をすぐに覚えると思います。その後で、開ける時、閉める時にそれぞれの字を見せます。ともに“もんがまえ”の字という共通性を見つけ認識を確かにします。

「白い靴下を履きましょうね」

出かけるときには必ず靴下を履きますから、「靴を履いて外に出る時に履くもの」という感覚ですぐに覚えるでしょう。靴も含め「履く」という感覚もわかってきます。この時、靴下の色をいろいろ用意して子どもに“好きな色”を漢字で認識させるのにも役立ちます。

「林檎をむいて食べようね」

「林檎」という字は今ではあまり漢字では使われませんが、特徴のある字ですので一度教えたら見ればすぐにわかるでしょう。漢字はあくまでも読めることが必要ですから、こういう字を教えるのもいいと思います。これは蜜柑でも西瓜でも梨でも同じです。果物は子どもの好物なので、覚えやすいと思います。

「ゴミを拾ってね、捨てるね」

「拾う」と「捨てる」は、大人でも間違えてしまいそうな漢字です。ですから余計に最初からはっきりさせておいたほうがいいでしょう。ともに「手」でする行為ですから、“てへん”の意味がわかってからやりましょう。

「炬燵に入りなさい」

今や「炬燵」などと漢字で表記することは少ないと思いますが、読めることは必要でしょう。子どもにとって「炬燵」ははっきりとした実在ですから、この字を貼って見せると「火」つまり“あつい・あたたかい”ものということで、記憶に残るでしょう。

「花瓶のお花は何本？ 何色？」

「花瓶」という字は「花」を覚えれば類推しやすいでしょう。これがわかったら、知っている色や数の花を入れて聞きます。この時花の種類をいろいろ変えてみると花の名前を覚えるのにも役立ちます。これは菊でも薔薇でも、カタカナのチューリップなどもいいと思います。かなやカタカナは抽象的な字ですが、こういう身の回りのものから覚えていきます。

「時計が鳴ったね」

子どもは特別なことがないと「時計」に興味を示さないかもしれませんので、時計が鳴った時に目を引いて「時計」の存在をわからせるようにします。「3時からテレビが始まるわよ」みたいにして、算用数字を覚えさせるにもよいでしょう。「鳴る」がもともと「鳥」に由来していることを教

えるのもいいのです。

「猫」や「猿」や「狼」

動物は子どもの関心が強いので、“けものへん”を理解させるのに役立ちます。この共通項を見つければそれだけでいいと思います。動物も今はカタカナ表記が多いのですが、読めるだけはしてやったほうがいいと思います。

「電話がかかってきたわね」

“あめかんむり”が「雨」に関係ある言葉で、それが「電気」に関係するとわかれば、「電話」という単語はすぐにわかるようになります。とにかく“人がいなくても話せる機械”という感じがわかります。子どもは電話好きです。呑み込みも早いはずですよ。

「お茶碗を持って食べなさい」

自分で食事を始めた幼児にとって「茶碗」は最も身近なものです。「茶碗」という言葉だけでなく、「持つ」という言葉も教えましょう。“てへん”が理解できれば、“手ですること”すなわち「持つ」という行為もわかりやすいと思います。

「お母さんのお手伝いをしてね」

「手伝い」ということは「手」を使ってすることというのはすぐにわかります。「伝」は“人が言うこと”ですから、「ああ、お母さんの言うことをやればいいんだ」と思います。この時に漢字カードで見せてやります。

「大根」や「人参」

これも今ではカタカナ表記も多いものです。しかしどちらも確かな実

在ですから、一緒に八百屋さんに連れて行って見せましょう。家を買って帰ってからも、野菜カゴに漢字カードを貼っておけば効果は増します。「葱」だって読むだけなら簡単です。

「扇風機をつけましょうね」

これは、「風」と「機」がわかってからがいいでしょう。「扇」が風を起こすものだとわかれば、“暑い時に風で涼しくしてくれる機械”という感じがつかめます。今はクーラーのほうが一般的ですが、これも同じ機能の仲間だと教えればよいでしょう。

「お手洗い」が「トイレ」や「便所」になる

「手を洗う」ということは最初から厳しくしつけていますので、“手を洗う”という行為はわかって、それが「トイレ」や「便所」になるとわかりづらいでしょう。しかしここは毎日何回も行きます。トイレのドアに三種類貼っておけば、自然と同じ所なんだとわかります。

「積み木で遊ぼうね」

「木」を知って、それが生えている木だけでなく、それを使って作ったものもこういうのだという認識が生まれます。子どもは「積み木」好きですので、「積み木遊び」を通して「積む」ということが“上に重ねていくこと”という認識ができます。

「羊」と「山羊」

どちらも子どもは絵本や動物園で知っているでしょう。「羊」は“美しいもの”のことですが、それよりも字に二本の角があって分かりやすいのではないのでしょうか。“ウールマーク”で羊の絵もたくさん目につきます

ので、それがわかったら山にいる羊が「山羊」になると話してみてもいいでしょうか、理屈ではなく呑み込めると思います。

「砂糖」と「塩」

どちらも同じような白いものですから、見た目では区別が付きません。実際になめさせてみたほうがいいでしょう。二つに漢字カードを貼って並べて味合わせてみて分かります。同じような“白い粉”でもまったく味が違うので、子どもの認識も強くなります。

「絨毯」

大人でもこの字を読める人は少ないと思います。しかし漢字は書けなくても読めればいいわけですから、目につくところに書いて貼っておきましょう。本文でも述べましたように、複雑な字ほど記憶には強く残ります。読むことに漢字の意味を求めましょう。

「お年玉あげようね」

「年」という字がわかれば理解しやすいでしょう。もともと「玉」は貴重なもの、お金を表していますから、こういって教えてやれば実感があります。こういうことを考えれば、最初は「お年玉」はコインのほうが望ましいかも……。

「楊枝を取って」

楊枝入れに「楊枝」と書いて貼っておきます。でもこれでは何に使うのかわかりませんから、実際に使って見せてやる必要があります。「楊」も「枝」も“きへん”がつきますから、子どもは案外この共通性を見つけ、「木」はいろいろな物になるのだなあ、と認識を新たにします。